

よみさんぼ

大宮見沼

第17号

写真家 野口勝宏

やどかりの里発！ 地域発見マガジン

特集

地域でともに暮らす仲間たち

特集

地域でともに暮らす仲間たち

ここはさいたま市見沼区南中野。「南中野」のバス停から数分のところに、クリーム色の外壁の2階建ての建物が見えてきました。開設4年目を迎えるのぞみホーム（障害のある人のグループホーム）です。社会福祉法人鴻沼福祉会が運営するのぞみホームは、6人の障害のある人たちの住まいです。障害のある人が暮らす場所や暮らしぶりを本誌で紹介したいと、日中は働きに出ている皆さんが帰宅する時間に合わせて、のぞみホームを訪問しました。

「楽しい」「安心」のぞみホーム

玄関を入ると、車椅子でも移動しやすいゆったりとした幅広の廊下、壁際には手すり、さまざまな障害に配慮したつくりとなっていました。車椅子でも利用しやすいように低めに設置されたキッチンでは、夕飯を準備中。卵割りを手伝っていたのは関口貴子さんです。織物が趣味で、自作の素敵なベストを見せてくれました。「のぞみホームでは他の人とケンカすることもあるけれど、楽しい」と笑顔がこぼれます。明るい笑顔で迎えてくれた上杉明美さんは、桶川にある「さいたま障害者労働センター」で働いて20年のベテラン。仕事が休



のぞみホーム

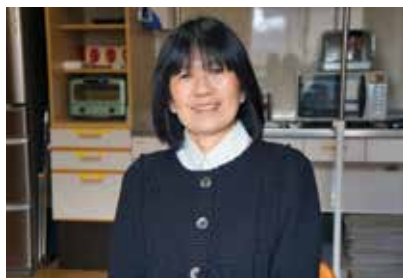


左から上杉さん、金沢さん、右側が関口さん

みの日は音楽やビデオ鑑賞をして過ごすのだそうです。3年前からのぞみホームで暮らす金沢知子さんは、言葉は少ないのですが「みんなでいると安心」と話してくれました。皆さんが寛ぐリビングには、旅行に行った時の写真や、季節柄ひな人形が飾られ、ホームの温かい雰囲気伝わってきます。

障害のある人たちの居場所づくりから始まった

社会福祉法人鴻沼福祉会は、さいたま市内を中心に、35年にわたり障害のある人の働くこと、暮らすことを支える活動を続けている団体です。その歩みを、のぞみホームの施設長酒井依子さんに伺いました。



酒井 依子さん

「1979（昭和54）年、全国で養護学校（現在は特別支援学校）の設置が義務化されました。ただ、せっかく通学できるようになり、力を培っても卒業後の行き先がなく、障害のある人たちが社会参加できる場はありませんでした。卒業後を在宅で埋めさせたくないと、障害児をかかえる親御さんや関係する人たちといっしょに日中通える場所をつくろうと始まったのが、鴻沼福祉会の活動です。1981（昭和56）年のことでした。親御さんや協力する人たちが街頭募金や物品販売などで資金を集めて『つばさ共同作業所』ができあがったのです。

養護学校を卒業する人だけではなく、行き場がないために何十年も家から出していない、という障害のある人たちが地域にはたくさんいました。衝撃を受けたのは、外出の機会がないために、靴を持っていない人もいたということ。近所の人とも顔を合わさず、閉ざされた生活を送る人が多くいたのです。そこで、在宅の人のもとを訪れては『つばさ共同作業所』を紹介しました。小さなプレハブ小屋で始まった『つばさ共同作業所』が、鴻沼福祉会の原点です」

当たり前前に働き、暮らすことの実現を目指して

当初は知的障害のある人のための作業所でしたが、精神障害のある人や中途障害の人などを受け入れていく中で、働く人が増えていったそうです。

「友だちができたり、働く中でそれぞれの世界が拡がり、『お給料をもった

くさんもraitai』『親の力に頼らないで暮らしていきたい』……人としての欲求が次々と芽生えていきました。そこで、さいたまコープ（現コープみらい）の協力を得て始まったのが『さいたま障害者労働センター』です。障害のある人が必要な支援を受け、雇用されて働く仕組みでした。また、家族の『保護』のもとではなく、自らの力で仲間（障害のある人）が生きていって欲しいと願い『たかさご荘』という暮らしの場をつくりました。当時はグループホームの制度もなく、自主事業でした。入居者や親御さんにとって、本人だけで迎える夜は心配です。そこで何人かの職員が、自分たちも家賃を払って住むことでスタートしました。斎藤なを子さん（本誌6P）は、同居人第一号でした」

1人1人が生活者

現在鴻沼福祉会には、障害者生活支援センターの他、5つの働く場があります。市内8か所に点在した暮らしの場では、50人の仲間が暮らしています。

「たかさご荘は30年の歴史があり、入居者の最高年齢は83歳。中には認知症が進んで歩行の仕方もわからなくなり、入院した方がいました。退院後、30年来ともに生活していた仲間が彼の部屋を訪れると、涙をこぼしたそうです。加齢により、徐々にさまざまな能力が低下していますが、長年いっしょに暮らしてきた人は忘れていない。人間の底力、生きる力を感しました。同時に、今まで紡いできた人間関係を大事にすることを教わったのです。

障害のある仲間たちが生活の主体者です。できれば人生の最期まで、その人らしさがにじみ出る暮らしを大事にしたい。障害のために自分の思いや願いを言葉に出して伝えられないこともあります。ですから、自分のしたい暮らしを尊重し、それをどう可能にするか、精一杯考えていかなくはいけません。みんな、それぞれ行きつけの床屋さんや美容院があったり、農産物直売所の方と顔見知りだったりします。作業所とともに働く仲間のご家族が亡くなると、みんなそれぞれコンビニで買って来た香典袋に名前を書き、香典を持って参列します。年賀状もまとめて作るのではなく、人によっては気に入った写真を付けるなどして、自分の年賀状を作ります。『1人1人が生活者』という視点が暮らしの随所にあるところを、私は誇りに思っています」

社会の多様性を実現するために

障害のある人たちが暮らす場は、まだまだ不足しています。酒井さんは、こうした社会資源の不足など、制度の課題を挙げます。

「高齢の親御さんの支えで、何とか生活を送る人たちが多くいます。のぞみホームのような暮らしの場の絶対数が不足しているのが現実です。本来職員には高い専門性や倫理性が求められる暮らしの場ですが、スタッフの数も足りません。障害のある人たちの所得がとても低いことも大きな問題です。作業所で働く人たちの工賃は月1～2万円。1人の大人として地域で暮らすには、厳しい現状があります。

また、趣味のサークルや公民館の講座へ行きたいと思っても、まだ障害のある人への理解や配慮が十分ではないため、馴染みにくい。いくら地域に溶け込んで生活をしたいと思っても、地域に受けとめる力がなければそれは難しいのです。例えば美容院や銀行を仲間が利用して、障害のある人たちと関わることで理解が広がります。それは障害のある人のためだけでなく、社会の多様性をつくっていく上でも、とても大事なことだと思います。通勤のために、仲間も近くのバス停に並びます。地域で触れ合う中で、障害のある人たちのことを理解していってもらうことも必要ですね。のぞみホームの仲間も、銀行口座をつくって自分でお金をおろしに行ったり、近所の整骨院やパーマ屋さんに行ったり……先日は通院先の看護師さんが、道端で仲間を見かけて声をかけてくれました。そういったつながりが、少しずつこの地域でも始まっています。これから地域の運動会や防災訓練、清掃活動などにも参加して、地域住民としていっしょにいろんなことに関わらせてもらえたら……と思っています」

障害のある人たちが地域の中で、当たり前に関わり、暮らせる社会を目指して活動してこられた鴻沼福祉会。のぞみホームで生き活きと暮らす皆さんの姿は、仲間の願いや思いとともに活動を広げてきた、鴻沼福祉会の歴史そのものであるように感じました。これからも同じ地域の一員として、1人1人の障害のある人たちの豊かな暮らしを実現するために、ともに活動を続けていきたいと思っています。

(取材：小野寺由希，萩崎 千鶴)

やどかりの里の仲間たち・16

「仲間が主人公」が原点



斎藤なを子さん（社会福祉法人鴻沼福祉会常務理事）

さいたま市内の中央区，見沼区を中心に障害のある人たちの支援活動を展開する鴻沼福祉会で働く斎藤なを子さん，北浦和生まれの北浦和育ち。

斎藤さんは，県立浦和第一女子高校に進学，高校時代に知的障害のある子どもたちの入所施設に関わる。「知的に重度の障害がある人たちが年齢を超過して何十年もそこにいて，異臭と暗いイメージが強烈でした。この姿をどう捉えたらいいのか，とずっと考えていました。そして，糸賀一雄さん（日本の社会福祉の父と呼ばれる）の『この子らを世の光に』という言葉に出会い，障害者であるという前に1人の人間だという主張に共感したのです」

高校卒業後，日本女子大学に入学。3月まで放映されていたNHKの朝ドラ「あさが来た」にも登場する創設者成瀬仁蔵の思想を学ぶ。「母校が朝ドラで取り上げられて，誇らしい思いでした。成瀬仁蔵の『女子の前に人間である』という思想は，『この子らを世の光に』とつながっていたのです」と語る。

大学時代から，鴻沼福祉会の前身となる活動に加わり，卒業後いわゆる無認可作業所の職員となり，現在は鴻沼福祉会を牽引しつつ，さいたま市内に留まらず，全国に海外にその活動は広がっている。でも原点にあるのは「仲間（障害のある人）が主人公」という思いなのだ。

やどかりの里との付き合いも古く，やどかりブックレット障害者からのメッセージ「自然体の自分を見つめて」（1999年）に鴻沼福祉会の仲間たちが登場したことがきっかけになり，その後さいたま市の障害者施策のことをいっしょに考えてきた。斎藤さんは，やどかりの里の魅力は「まず第1に女性ががんばっていること，すっと溶け込める雰囲気があること，そして，障害のある人が真ん中にいるということですね」とにっこり笑って話してくれた。（記 増田 一世）



よみさんぽ 日誌

「自然栽培と食」をテーマにしたワークショップ

食に学び、食を楽しみ、食でつなぐご縁づくり

週末に農のある暮らしを体験できる学校として、2012（平成24）年、三芳町に農業体験スクールソラシドが開校しました。やどかりの里からも職員2名が受講し、自然栽培の基本知識と栽培技術の基本を学んでいます。

縁あって、ソラシドとの共催で「**自然栽培と食**」をテーマにした**ワークショップ**を開講することになりました。場所は、大宮区天沼町にある喫茶ルポーズです。季節の野菜を家庭の食卓で、簡単に、美味しく食べられる調理方法を学ぶ料理教室（全5回）と「美味しいから始まる会」として、自然栽培の野菜を**食べる会**（全5回）を開催します。自然栽培は他の栽培方法とどう違うの？なぜ無肥料で野菜が育つの？無肥料自然栽培の野菜はどうして体にいいの？固定種、在来種って何？旬のお野菜は何？昔ながらの農家の生活って？他にも保存食や発酵食のお話など、食を楽しみながら、農と食に関する基礎的な知識についても学べる内容になっています。

ワークショップを通して、「**おいしい（食べること）は幸せ**」「**楽しい（笑って食卓を囲む）は幸せ**」を広げていきたいと思えます。やどかりの里の働くメンバーの姿を写した写真展も同時開催。やどかりの里を知るきっかけにもなれば幸いです。たくさんの方のご来場お待ちしております。（記 宗野 政美）

開催日 1) **食べる会**：5月22日（日）、6月19日（日）、8月7日（日）、9月25日（日）、10月23日（日）

いずれも12：00～

2) **料理教室**：7月17日（日）、11月20日（日）、12月4日（日）、1月15日（日）、2月19日（日）

いずれも10：00～

場所 喫茶ルポーズ さいたま市大宮区天沼町 1-136-2 Tel048-657-0202

詳しくは、<http://www.sorashido-school.com/>

または、やどかり情報館（048-680-1891）田中真弓まで

あの街 この街 俊一郎が行く・11

自然を理解し、共に生きる

田舎の家のその後

こんにちは！ 本誌 12 号で紹介した祖父の故郷である田舎の家。壁には、壁紙の補修とにお取りの効果を期待して漆喰を塗り、引込んだ状態のままにしていた襖は表面がカビてしまっていたので柿渋を塗り、ようやく部屋の空気の不快感がなくなりました。傷み始めている軒板の交換など、まだまだ気になるところも多いですが、半年かけてようやく落ち着いてきました。

なんにもない なんにもない

それまでは、家についてもしばらく換気しないと落ち着かず、掃除や片付けなどやることも多く余裕がなかったのですが、秋になって落ち着いてみると、やることがない。どうしたものかと思いつつ、向かいの山の上の畑に行ってみました。幼い頃に何度か収穫の手伝いをしたこともある小さな畑は、畝も姿を消し、得体の知れない蔓植物が地表を覆っていました。よく見ると、その蔓には拳大の実がなっていました。調べてみると「隼人瓜」というウリの仲間。もともとは外来植物の隼人瓜は実のなり方も豊かで、旺盛な生命力を感じます。以前は何種類もの作物が整然と植えられていた畑が駆逐されているような悪印象を抱きつつ、いくつかに収穫。うんざりするほどになっていた隼人瓜は、それを喜べるほど大量に食べられる物ではありませんでした。ただ「この畑はこのままでは荒れてしまう」という危機感を抱かせてくれた存在でもあります。そして、今まで人の手が入ることで、この山の中でも畑として存在してきたことを知りました。とりあえず春を待ちます。



農という言葉

「農」という言葉は身近でありながら、その語源について改めて調べてみま

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）



した。上に書かれている「曲」という字は森や林を示し、下の「辰」という字は、それらを切り開く道具を意味するらしい。漠然と土に種を蒔けば作物が得られるように考えていましたが、畑は耕さなければ森に帰ってしまうのです。

春が来て

春が来ました。意を決して鋤^{くわ}を片手に山の畑に向かいます。地面を覆い尽くしていた隼人瓜はすっかり枯れて、今度は全面ツクシに覆われていました。祖父が野菜を植えていた記憶がある場所に、鋤を入れてみます。数年は放置されていたかもしれませんが、元々畑だった場所は、石などに邪魔されることもなく耕しやすい。まずは土を起こして、雑草を取り除こう。そして、放置すればまた生えてきてしまう隼人瓜を取り払おう。冬眠していたのでしょうか、耕していると土の中からカエルやミミズが現れてきました。こいつらのおかげで、相変わらず耕しやすいのかもしれませんが。

ジャガイモ

枯れた蔓の片付けや意図せず生えてきてしまった小木などを取り払い、決して広くはない面積を耕したら、一通り手を入れた転居先のように畑が少し身近な存在に感じられるようになりました。農の知識はまるでありませんが、まずはほうっておいても育てられる作物と教えてもらったジャガイモを植えよう。畑の脇にはカボチャも……うまくいくかはわかりません。もし失敗したとしても、この行為が自分と畑、そしてそれらを取り囲む自然を理解し、共存する道しるべになるような気がします。



あなたの街のやどかりさん

エンジュ

多くの人に利用されるエンジュに

栄養バランスのとれた食事をお届けし続けて

エンジュは、昼食と夕食の弁当づくりを行っています。昼食は、見沼区と大宮区に宅配を行い、夕食は、さいたま市在宅高齢者等宅配食事サービス事業（大宮区・見沼区・緑区の一部）の委託を受け、調理・配送しています。また、やどかりの里に登録している精神障害のある人たちにも提供しています。

弁当宅配に関する、調理、洗浄、盛付、配達、電話対応、事務など、さまざまな仕事を精神障害のある人と職員で手分けして取り組んでいます。

エンジュで働き続けて

斎藤正文さんは、学生時代に精神疾患を発症、療養を経てエンジュを利用するようになりました。開設の頃を知る数少ない1人でもあり、これまでの歩みを聞きました。「僕は、料理も作れないし、お金の勘定もできないし、弁当箱洗いならできるかな、と思ってエンジュで働くようになりました。とにかくたいへんで、最初は工賃が今の半分以下の時給200円だったこともあって、気持ち



斎藤 正文さん

ちも疲れて午後3時くらいになると幻聴（その人にしか聞こえない声や物音）が聴こえて、翌日遅刻することもありました」

お客様の「ありがとう」に励まされて

斎藤さんは、仕事を始めた頃は洗浄の仕事専門でしたが、徐々に配達や受付の仕事をされるようになりました。特に配達は、お客様に

第16回

エンジュは、精神障害のある人たちの働くことを支える事業所で、高齢者向けの弁当宅配を行っています。障害のある人も弁当事業の担い手となって生き生きできる職場になれば、という願いから出発しました。1997（平成9）年7月に中川（見沼区、当時大宮市）でスタート、2012（平成24）年の南中野（見沼区）への移転を経て、20周年を迎えようとしています。

失礼なことをしてしまうのではないかと躊躇ちゅうちよしていました。「（配達に行ってお客様に『ありがとう』と言葉をかけてもらって心強かったです。また、いっしょに働いている人たちといろんな話をして、人と関わることや仕事の仕方などを教わり、経験を積んだことが仕事にも活きていると思います）」

もっとエンジュを利用してもらいたい

仕事でいろいろな人と関わりながら成長してきた齋藤さん。今後の抱負を、「前のところも古臭くてよかったかな。移転して大きくなって働く人も増え、いろいろな人がいるけど柔軟に対応して、チームワークよくやってくれればいいです。売上が伸びて工賃が上がって、障害年金と工賃で暮らせるようになりたい。エンジュは弁当宅配だけでなく、お惣菜販売をしたりして、もっと地域の人たちに気軽に利用してもらえるようになればいいな」と語ります。

弁当づくりを通じて、多くの人とつながりながら、働く人も成長しています。地域の人たちに「エンジュがあってよかった」と言われるように、これからも頑張っていきたいと思います。（記 永瀬恵美子）

弁当を利用いただいている方の中には、エンジュ開設間もない頃から昼食をとり続けてくださっている人がいます。そのお1人、見沼区にお住まいの高橋隆亮さんから、メッセージをいただきました。「健康を守るために食生活に気を付けたい、という思いでエンジュ弁当をとっています。おかずはよく研究されていると思います。エンジュの弁当が、土日も含めて毎日配達してくれるようになるといいですね。よいものを作っていると思うので、近所で必要な人がいれば、紹介していきたいと思っています」

こうした人たちの声に、エンジュで働く人たちが支えられています。

やどかりの里に出会い、新しい世界を知りました

さだのぶ
松田 定修さん

(やどかりの里 非常勤職員)



松田定修さんは、やどかりの里が運営する「大宮東部活動支援センター」「すてあーず」「エンジュ」に所属し、エンジュの弁当配達を終えるとすてあーずの物品販売に出かけるなどひっぱりだこの存在。もともと飲食店を営んでいた松田さんが、お店をたたんでやどかりの里で働くようになって13年目を迎えます。やどかりの里との出会いを振り返っていただきました。

やどかりの里との出会い

「仕事を辞めてから、しばらくはぶ

らぶらしていようと思っていたんですが、だめでしたね……1か月ももたなくて、結局ハローワークに行っ
て、とにかく『年齢不問』という求人を探したら『大宮東部活動支援センター』がありました。採用面接に行った時、昼間なのに横になっている人や若い女性がいったりして、正直、よくわかんないところに来ちゃったかな、と思いました。やどかりの里というのも、精神障害のある人のことも何も知識もなかったのですが、自宅から近いし、この年で雇ってもらえれば、と思いました」

松田さんといっしょに配達に行っているメンバーからのメッセージ

「松田さんは、どんな人にも心を開いてくれるように思います。私は人と接する時に緊張してしまうのですが、松田さんは最初から安心感がありました。配達の際、新規のお客さんのところには先に行ってくれたりして、とても心強く、リラックスして仕事ができます。私が安心して配達を続けられるのも松田さんのおかげです。これからもよろしくお願いします」

メンバーと出会って

「メンバー（精神障害があり、やどかりの里を利用している人）といっしょに配達や販売に行ったり、メンバーの家に弁当を配達したりして、だんだんと精神障害のある人は疲れやすいのかな、と知るようになりました。弁当を届けて、暗い部屋で布団にくるまって過ごしている人を見ると、何とかならないかな、とも思います。また、メンバーの中には、仕事が順調になり、働く時間を伸ばしても思うようにいかない時もあります。あきらめないで次の一步を踏み出す気持ちをもって欲しい。それぞれ個性があって、それがいいと思います」

今まで知らなかった世界に触れる

「メンバーと話したり、やどかりの里が関わる集会に参加したりする中で、こんな世界があったのか、という思いを抱きます。2014年に、精神科病棟を住まいに転換するという問題を考える集会に参加しました。結局家には帰れないんでしょう。自分の住所が病院になるなんておかしい。

知り合いが東村山のほうにいるから、多摩の全生園（国立療養所多摩

全生園、ハンセン病国立療養所の1つ）の近くをよく通るけど、ハンセン病の人たちがおかれてきた状況と同じだね。未だに、精神科病院に長く入院している人がいるんでしょう。やどかりの里で働くようになって、初めて知ることがたくさんあります」

地域で暮らしていけるよう

「まだまだ精神科病院に長く入院している人たちがいると思うと、もっと受け入れ体制が充足するといいですね。やどかりの里に期待しています。やどかりの里の職員は遅くまで仕事していて、ますますたいへんになっちゃうかな。自分としては、健康で、できるだけ働き続けていきたいです」

柔軟な姿勢に学んでいます

多様な人たちといっしょに働く時の関わりや、臨機応変な仕事ぶりに、さすが人生の先輩、と思っています。改めてお話を伺って、やどかりの里で再スタートを切った後もさまざまなことを吸収されているんだなあ、と思いました。やどかりの里の事業所だけでなく、配達などで地域を駆け巡る松田さん、いつも助けられています。（記 永瀬恵美子）

インフォメーション

「熊本地震」募金協力のお願い

九州地方に甚大な被害を与えた「熊本地震」。犠牲になられた方に心よりお悔み申し上げるとともに、被災されているすべての方にお見舞い申し上げます。

障害のある人たちの支援活動を展開するきょうされんでは熊本地震への募金を呼び掛けています。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

郵便振替 □座名義：きょうされん自然災害支援基金口

□座番号：00100-7-86225

「自然栽培と食」がテーマのワークショップ

- 自然栽培の野菜を食べる会／5月22日(日), 6月19日(日), 8月7日(日), 9月25日(日), 10月23日(日) / 12:00～
- 料理教室／7月17日(日), 11月20日(日), 12月4日(日), 1月15日(日), 2月19日(日) / 10:00～

場所 喫茶ルポーズ(さいたま市大宮区天沼町1-136-2) 048-657-0202

詳しくは、やどかり情報館(048-680-1891) 田中まで

あゆみ舎が使用済み PC の回収を始めました！

不要になったPC・携帯電話・スマホを無料でご自宅へ引き取りに伺います。持ち込みも大歓迎です。データ消去作業は株式会社アンカーネットワークサービス(<http://www.anchor-net.co.jp/>)が責任をもって消去いたします。

問い合わせ先 あゆみ舎

〒330-0804 さいたま市大宮区堀の内町1-37-103 TEL 048-648-2555

受付時間 月～金(祝祭日は除く) 9:00-18:00

楽器提供のお願い



使わなくなった楽器(フルート、クラリネット、ギター、ベース…)を提供して下さる方を求めています。

障害のある人たちとの音楽活動に活用させていただきます。

詳しくは(048-688-8223:宗野)まで

おいしく食べて
健やかに

栄養バランスのとれた
お弁当で食生活を変えます



昼食 1食 550円

月～金、1食からお届けします！

※おかげや刻み食も対応します

※ご希望の曜日にお届けします

エンジュ TEL 686-7875

＜受付＞月～金(祝日を除く) 8:30～18:00

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために

こうぬまふくしかい

社会福祉法人 鴻沼福祉会

こころを込めた手づくりの品をぜひ一度お試しください



いちず
とうふ屋 一豆

TEL 048-854-8000

FAX 048-854-3538

さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、国産・手づくりにこだわった本格とうふ。
宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を100%使用し、オリジナル惣菜も人気です。
大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる“小さなぜひたく”を食卓にお届けします。

きりしきのパン

TEL 048-854-6910

FAX 048-854-6942

さいたま市中央区円筒1-3-15 鴻沼福祉会館内

きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心にこだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。(一部糖質を除く)

この道30年の職人とともに手がけるパンは、少し懐かしい味と香りがします。



弁当屋 いちず

TEL・FAX 048-684-1257 さいたま市見沼区染谷2-145

そめや共同作業所のお弁当は旬を感じる手づくり弁当です。
野菜をたくさん取り入れ、手が込んでいると女性に大人気です。

鴻沼福祉会から読者の皆様へ

○鴻沼福祉会では、袋詰め・部品組み立て作業や清掃作業、資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な仕事を受注しています。働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスをお求め新しい仕事にもチャレンジしつづけています。

○障害のある人たちの就労支援、生活支援、相談支援のスタッフを募集しています！ 問い合わせ先：048-854-6890 (担当オガワ)

鴻沼福祉会事業所一覧

●本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円筒1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL:048-854-6890 FAX:048-856-0313

《はたらく》●つばさ共同作業所(中央区) ●あざみ共同作業所(見沼区) ●そめや共同作業所(見沼区) ●きりしき共同作業所(中央区)

●さいたま障害者労働センター(楊州市)

《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえてホーム ●かりんホーム ●よつばハイツ

●なつめホーム(以上、中央区) ●のぞみホーム(見沼区)

《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢(以上、中央区)

●見沼区障害者生活支援センター来人(見沼区)

大宮見沼よみさんぽ

作者紹介

写真家 野口勝宏さん

のぐちかつひろ／写真家。福島県在住。東日本大震災を機に「福島の花の美しさで世界の人々を笑顔にしたい」と「福島の花」シリーズを制作。福島県観光キャンペーン「福が満開、福のしま」においてはJR東日本のメインイメージに採用され駅構内・車両を花で彩る。全国各地での写真展開催の他、病院や福祉施設などでの展示も手掛ける。また、2016（平成28）年5月14日に国内就航を開始するANAの復興支援「東北FLOWERJET」の機体を東北の花々でデザイン。全国に明るさを届けたいと活動をしている。野口勝宏オフィシャルサイト <http://noguchi.photo>

表紙：オトメユリ マーガレット
山の緑が深まる季節に
初夏らしいひとときの色どり
それぞれが 風にゆられて
光を受けて
あしたへの思いをつないでいる

題字 宗野文さん

学生時代から書道が大好きで、子育て中の今、我が子とともに習字に再挑戦中。やどかりの里の作業所「すてあーず」所長。見沼区南中丸在住。

大宮見沼よみさんぽ 第17号

発行 2016年4月（春号）

編集 「大宮見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<http://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。

「大宮見沼よみさんぽ」編集委員一同